
Girl Lyrical Nanoha ~ The Flame Of The Sky ~

Zeebra

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c a l G i r l L y r i c a l N a n o h a
T h e F l a m e O f T h e S k y

【Nコード】

N9600W

【作者名】

Z e e b r a

【あらすじ】

ひよんなことから海鳴市にやってきたツナとリボン。だが、それは新たな始まりにすぎなかった。家庭教師ヒットマンREBORNと魔法少女リリカルなのはのクロスオーバーです。キーワード追加しました

標的1 序曲〜プロローグ〜(前書き)

リボンとなのはが好きで始めちゃいました^^

皆さんよろしくお願ひします!~> 「 「 () <

標的 1 序曲〜プロローグ〜

海や山に囲まれ、自然を色濃く残す街“海鳴市”。

そこにツンツン頭の一人の少年とその肩に乗る黒いスーツと帽子を着た赤ん坊がやって来ていた。

少年の名は沢田綱吉。ツナはすぐ近くにあるは海岸の堤防の上にあった。

(綺麗な海だなー…)

「すうー…、はあー…」

別に自然を感じたいとかそういう理由ではなく、本当にただなんとなく、ツナは大きく深呼吸した。

「久しぶりだけど、やっぱり綺麗なところだよなー…。ていうかりポーン、良く知ってたよな？ この街のこと…」

ツナは肩に乗る赤ん坊に尋ねる。リポーンと呼ばれた赤ん坊はその問いに答えた。

「こんなの俺にとっては常識だぞ」

あたかも当然のようにリポーンは答えた。

ツナとリボーンがこの街に来た経緯。それは今朝に遡る。

「ツナ、今日はこれから海鳴まで出かけるぞ」

朝食の時間、リボーンがツナに尋ねる

「ちょ！？ どういうことだよリボーン！」

海鳴市と並盛町は隣あった市町村である。ツナも昔何度か遊び行った事のある場所であるが、最近に行く事がなく、記憶もぼやけていた。印象に残っているのは綺麗だという所ぐらいである。

ツナはリボーンが何故そこに行きたがっているのか分からなかった。

その質問に、リボーンが答えた。

「下見だぞ」

「下見？ 何の？」

「今度ここでボンゴレファミリーの親睦会をやるつもりだ」

「んな！ なんだよそれ！ ていうか何でこの街なんだ!？」

ファミリーの親睦会のこともあったが、まず何でこの街でやるつもりなのかにつっこんだ。

リボーンは性格上、そういう事をする場合大抵ぶっ飛んだ提案をし

てくる。県外はおるか海外に行く提案してきてもおかしくない。

それが隣の市、しかも特に有名というわけではない場所である。ツナは何かあるんじゃないかと疑っていた。

「この街は自然に囲まれているだけじゃなくて、ちゃんと公共施設も完備してあるんだぞ。それに近くの街だ、マフィアのボスとしてはきちんと把握しとかねえといけねえ。というわけで次の連休、この海鳴温泉で親睦会を開くことにしたぞ」

「何勝手に決めてるんだよ！ だいたいファミリーの親睦会って！ 雲雀さんや骸が来るわけないだろ!？」

「それはボスのお前の仕事だ」

(人任せー！)

頭を抱えるツナ。結局ツナは下見として海鳴に来ることになった。

それから暫く海を眺めるツナ。そんな時、リボンがツナに話しかけた。

「いつまでそうしてんだ？ 行くぞ」

「わかってるよ。海鳴温泉…で、いいんだろ？」

「いや、その前に一つ寄つとかねえといけねえ場所がある」

「寄つとく場所？」

ツナが尋ねる。ちょうどその時、ツナの超直感が何かを感じた。

「何だこの感じ……」

呟くツナ。同時にリボンも呟いた。

「やべえな……」

「ヤバい！？ 何が!？」

「説明してる時間はねえ。とりあえず行くぞ」

走り出すリボン。それをツナは追いかけた。

ツナが走り出して数分後、海鳴市のとある神社。

そこに茶髪のツインテールの子と、一匹のフェレット、そして黒い

異形の怪物がいた。

「原住生物を取り込んでる」

フレット、ユーノがツインテールの少女、なのはにそう言った。

「ど、どうなるの!?!」

「実態がある分、手強くなってる!」

ユーノがそうなのは説明し終わるとほぼ同時に、黒い怪物は襲いかかってきた。

「なのは! レイジング・ハートの起動を!」

「ふえ!?! 起動ってなんだっけ?」

それからすぐにユーノがなのはの肩に乗った。

「『我は使命を』から始まる起動パスワードを…!」

「えー! あんな長い覚えてないよ!」

「もっかい言うから繰り返して!」

そう言うが、怪物はもう近く。今からじゃ間に合わない。

でもやるしかない。そうユーノが決めた時、なのはとユーノの目の前に一人の少年がスッと現れた。

そしてその少年は片手で怪物の動きを止め、もう一方の手で怪物を殴り飛ばす。

「誰…!？」

なのはが叫ぶ。そして目に入る。額に揺らめく橙色の炎を…。

「下がっている」

沢田綱吉がそこに居た。

設定（前書き）

設定です。

設定

1、世界観

<標的1 序曲〜プロローグ〜>を見れば分かる通り、この作品は属に言う異世界転移ものではなく世界観クロス作品です。

なのはは無印からリボーンは?????って感じですよ。

リボーンがこれからどうなるのか分かりませんので…。

とりあえずツナ達が中学生であるということだけは間違いありません。

2、ツナ達の強さ

ツナたちの強さはV.GでSSランクあたりの戦闘能力にしようと思えます。よって最強ではありません。

SSSランクのオリキャラとか出て来るかもしれませんが。そのため書いていく中でパワーアップしていくと思います。

多分かなりインフレすると思います。

あと、根本的な戦闘力も一部おかしくなってあります

一番顕著なところを上げるとすると初代ボンゴレファミリーです。ジヨットの戦闘力がSSS+ぐらいあります。

3、管理局について

この作品は管理局アンチに近いです。ですが、作者は別に管理局が嫌いと言うわけではありません。

ただ、この作品は社会の裏とか、そういう所も物語的に絡んできません。管理局の非道な行為や、事実隠蔽などが出てきます。

管理局アンチが嫌な人は見ない方が良くかもしれません。

4、恋愛

この作品のヒロインは今のところ決まっておりますが、ツナは恋愛フラグを結構乱立させると思います。ですがハーレムではありません。

あと、皆さんの要望はできるだけだけ叶えていこうと思いますが、誰と誰がくっつくかとかは最終的に自分がじっくりと考えて決めますの

で、要望通りにならないこともあるかもしれません。

あと、すでに決まっているものもあるので、それについても皆さんの要望通りにいかないかもしれません。

申し訳ありません。

あと、ツナの相手についてもまだ決まっております。

色々候補は決まっておりますが、これについても皆さんの意見をできるだけ参考にしたいと思えます。

設定（後書き）

だいたいの設定はこんな感じですよ。

恋愛とか以外にも、何か要望がありましたら気兼ねなくお願いします。

あと、変更した方がいいと思ったところもありましたらお願いします。

できるだけ叶えていこうと思います。

こんな自分の書く駄文ですがよろしくお願いします。

標的 2 魔法（前書き）

やっと第2話です。

皆さん待たせて申し訳ありません。――（――）――（――）――

標的2 魔法

「下がってる」

額に灯された橙色の炎が揺らめき、ツナが身につけている赤いグローブに炎が灯る。

そして殴られた黒い怪物は、まるでダメージを負っていないかのようにならなかつた。

(ほとんどダメージはないか…)

グローブに炎は灯していないものの、手は抜いていない。ツナにとっては予想外のことだった。

それを後ろで、傍観するのは。そんなのはにユーノが言った。

「なのは！今のうちに！」

「え！あ、でも…！」

ハツとし、戸惑うのは。ユーノもそれが正しい選択かは分かっていなかった。目の前にいるこの少年には“魔法の力”が感じられなかったからだ。

それでもこの選択をしたのは、あの炎と瞳にみせられたからかもしれない。

「大丈夫…！きっと…」

その言葉に確証はない。だが、なのはもユーノと全く同じ、不思議な安心感を抱いていた。

そしてなのははユーノの言葉に頷く。

「…うん！」

それからなのは赤い宝石を握る。

「いくよ！ 我、使命を受けしものなり」

「我、使命を受けしものなり」

「契約のもとその力を解き放て」

「契約のもとその力を解き放て」

「風は空に星は天に」

「風は空に星は天に」

「そして不屈の心はこの胸に」

「そして不屈の心はこの胸に」

そこから先はなのは一人が口にした。

「この手に魔法を…、レイジングハート！ セット・アップ！」

《Stand by, ready, set up!》

赤い宝石が突然輝きだす。それに気づいたツナは怪物から目を離し、なのはの方に視線を向けた。

そこにいたのは先ほどとは違う、白い、天使を連想させるような服装の少女。手には杖のようなものが握られている。それはまるでテレビや漫画に出てくる魔法少女そのものであった。

「一体：どういうことだ…？」

今まで感じた事のない異質な力。それをツナは肌で感じていた。

そんなツナに意もせぬ方向からの声が聞こえてくる。

「すみません！ っしだけ手を貸してください」

その声に、ハイパー死ぬ気モードのツナも驚きを隠せなかった。その声の主がフレットだったからである。

「しゃべった…？」

それに気づいて、ユーノは言葉を続ける

「事情は後で話します。僕たちがアレを封印しますので、あなたは気を引きつけてください」

完全に理解できたわけではないが、今の状況を考えれば言うとおりにした方がいい。なにせ自分はこの黒い怪物のことも肌で感じている異質な力の正体も分からないのだから。

そしてツナのグローブの炎が更に強くなる。次の瞬間、ツナの姿がなのはとユーノの視界から消え、一瞬で黒い怪物の真後ろに回り込んでいた。

(なんて速さだ…！)

軌跡すら目で追えない速度に、ユーノは感嘆する。

そしてツナは背後から、怪物の後ろ足にそつと手を添えた。

「死ぬ気の零地点突破・初代エディション^{ファースト}」

ツナが呟いた瞬間、怪物の左足が凍りつく、それからツナが叫んだ。

「動きは止めたぞ！」

それを確認、ユーノはなのはに合図を出す。

「なのは！今のうち！」

「あ、うん！」

それからなのはは杖を構えた。

(いくよ！ レイジンググハート)

《Sealing Mode・Setup》

なのはの持つ杖、レイジンググハートから翼のようなものが姿を現す。

そして杖の先端が輝きだし、ピンク色の帯が出現。それが怪物を縛るように拘束すると、怪物の額に??の文字が浮かび上がる。

《Stand by・Ready》

「リリカルマジカル。ジュエルシード、シリアル16。封印！」

《sealing》

そして黒い怪物が輝きだし、そこからひし形の宝石が出現する。それとともに黒い怪物は消滅し、小さな子犬に姿を変えた。

怪物から出現した宝石はというと、なのはのもつレイジングハートに引きつけられ、先端の丸い宝石の中に吸い込まれた。

ちょうどその時、リボーンが階段を駆け上がってきた。

「どうやら終わった見てえだな」

「リボーン！」

ツナが叫ぶ。それに反応し、なのはとユーノも振り向いた。

「何してたんだよ！ 今まで！」

リボーンの遅い到着に叫ぶツナ。その時、先ほどまでとは全く違う雰囲気少年に、なのはとユーノは戸惑った。

だが、今はそれよりも言わなければならない事がある。なのははツナに近づいた。

「えっと…、あの、さっきはどうもありがとうございます！」

戸惑いながらも礼を言うのは。それにツナは微笑んで答えた。

「いやいや、いいよ別に！ それよりも、さっきのことについて、教えてくれない」

先ほどの時とは真逆の安心感。それを感じ、なのははホッとする。

そして同時に、心の中でユーノに話しかける。

「（ユーノくん、事情、話してもいいよね…？）」

「（うん。僕が説明するよ）」

そして一匹のフェレットがツナとリボーンに近づいてくる。

「今から、僕が説明します」

それから、ユーノは語り始めた。

魔法の事、自分たちの探し物の事、そして先ほどの怪物の事…。

だが、説明を聞いてもまだパツとしていないツナ。

それは当然だろう。いきなり魔法がどうこう言われても信じられないはずがない。

だが、辻褄はあっている。それに自分が感じた異質な力の正体も魔

法ならば納得ができる。

それに、自身もこれまでにあり得ない体験を何度も経験しているし、そんなウソをつくようにも思えない。

「分かった。信じるよ」

答えるツナ。そして覚悟を決め、自身の決意を口にした。

「あと、そのジュエルシードっていうの集めるの、俺も手伝っていいかな？」

その言葉になのはとユーノは驚いた。

「魔法のことは今でも良く分からないよ。でも、ジュエルシードっていうのがすごい危険なものだってことは分かる」

そしてツナはそつとなのはの頭を撫でる。

「へ？」

「俺、もう知り合っちゃったし、それにこんな小さな女の子が頑張ってるのに、俺が何もしないわけにはいかないよ」

そう言いながらなのはを見つめるツナ。なのははいきなりの事であったため、照れて頬を赤く染めていた。

「いいんですか？」

「俺、隣町に住んでるからそんなに協力できないかもしれないけど、

できるだけ手伝うよ」

「こいつがこうなったら梶子でもうごかねえぞ。それにお前たちにとっても協力者は多い方がいいだろ？」

ツナとリポーンが言葉を返す。それにユーノがお礼を言った。

「ありがとうございます」

それから神社の階段を、ツナ、リポーン、なのは、ユーノは下っていた。

「はあ、なんか疲れたよ。もう下見はいいだろ？ リポーン」

「まだまだ時間はあるぞ」

リポーンという言葉にため息をつくツナ。そしてなのははツナに尋ねた。

「へえ、ツナくんたちって下見に来たの？」

「うん、そんなとこ。隣の市だけどあんまり来た事ないしね」

そう言い終えた時、不意にあることを思い出したツナ。ツナはそれをリボーンに尋ねた。

「そういえばさ。下見より前に行く場所があるっていったじゃん。そこってどこ?」

その問いにリボーンはツナとなのはを一瞥して答えた。

「喫茶翠屋だ」

標的 2 魔法（後書き）

こんな駄文を読んでいただきありがとうございます！

これから学校が始まるので、更新遅くなるかもしれません。

本当に申し訳ありません。

標的3 翠屋（前書き）

今回は新しいりボキヤラ登場です。

そして色々やっちゃった感があります。

唯でさえ駄文なのに…

申し訳ありません。

標的3 翠屋

翠屋、それは駅前商店街の真ん中にある、ケーキとシュークリーム、そして自家焙煎コーヒーが自慢の喫茶店である。

今、ツナたちはその翠屋の目の前まで来ていた。

「ここが翠屋…」

目の前にある大きな建物を眺め、ツナが呟く。その建物には翠屋と書かれた緑色の看板がついていた。

そしてツナはなのはをちらつと見る。リボーン用の場所が喫茶店だった事にも驚いたが、まさかなのはの父親と母親が切盛りしている店だとは思わなかった。

「どうしたの？ ツナくん？」

なのはがツナの視線に気づく。ツナは、首を振って答えた。

「いや、何でもないよ」

「なら行くぞ、ツナ」

リボーンがツナにそう言い、翠屋の扉の前まで行く。

そこでツナはふと勘ぐってしまった。

（あれ？ よくよく考えればなんで喫茶店にようがあるんだろ？）

ツナがそう考え始めた時に、リボーンとなのはが翠屋の扉を開けた。

「おお！ なのは！」

レジの傍で立っている一人の男性が叫ぶ。年齢は分からないが、見た目はかなり若い。それに結構な美形であった。

（なのはの父親…？ て言う事はこの人が士郎さんか…）

来る途中のなのはの説明を思い出すツナ。ちょうどその時、自分の肩に座るリボーンがいつもの挨拶言葉を口にした。

「ちやおツス」

「リボーン！ 君か！」

（へー、リボーンなのはちゃんのお父さんと知り合いなんだ…って、えー！？）

ツナが心の中で絶叫するのと同時に、なのはが士郎に駆け寄る。

「えー！？ えー！？ お父さんリボーン君と知り合いなの！？」

「うん。まあ友達みたいなものだよ」

本当に優しい目をしている。なのはと話をしているその人を見て、ツナはそう感じた。そして何故か自身の父親を思い出してしまった。

（えらい違いだよ…）

ぐうたらでいい加減な父親を思い出し、ちょっと落ち込むツナ。最も今は別に嫌いと言っわけではない。

ふとそんな考えごとをしている最中、士郎が不意をつく思いもよらない言葉を口走った。

「君は…、もしかして綱吉くんかい？」

「へ！？ 俺のこと知ってるんですか！？」

その不意打ちに、ツナは驚きの声を上げる。そしてなのはも同じくらい驚いていた。

「お父さん！ ツナくんの事も知ってるの！？」

（リポーンが教えた…？）

ツナとなのはの二人の問いに、士郎はにっこりと笑って答えた。

「綱吉君のお父さんとは古くからの友達でね。小さい頃だから覚えてないのも無理ないけど、何度か会ったことがあるんだよ」

と言ってもツナには全く覚えがなかった。

「そうだ！ ちょっと待ってて…、桃子！」

ツナが思い出そうとする中、士郎はそう言いながら桃子を呼びに行く。

桃子、それはなのはの説明にあった自身の母親の名前であった。

それからすぐに一人の綺麗な女性が奥の、おそらく厨房から現れる。

(うわー、すっげー美人…)

思わず見惚れるツナ。なのはも大きくなったらこんな感じになるのかな？と妄想し始めたが、すぐに首を振って我に帰る。

「ホントに大きくなったわね、綱吉くん。リボーンさんも久しぶり」

「はあ…」

「久しぶりだな」

記憶がないため曖昧な返事するツナ。それに対し、リボーンはいつも通りの何か偉そうな態度である。

それから桃子はなのはに視線を向け、残念がる顔をした。

「うーん…、ホントは今にでもなのはとどうやって知り合ったかとか、他にも色々話し聞きたいんだけど、そうゆっくりしている時間もないからね…」

それから何かひらめいたかのようにポンと叩いた。

「とりあえず、何かケーキでもどう？」

それから、ツナとなのはとユーノは翠屋の外にある席に座りケーキを食べていた。ちなみにリポーンは中で土郎と話していた。

ツナはホークを掴み、イチゴのショートケーキを口に運んだ。

「うん！ これ！ すごくおいしいよ！」

「でしょでしょ！」

なのはがにっこりとしてそう言い、自身のイチゴのショートケーキを一口食べる。

それからなのはは心のなかでユーノに問いかけた。それは念話と呼ばれる魔法であり、魔力持つ者なら誰でもできる会話方法である。

「（ユーノくんもケーキ食べる？）」

「（僕はいいよ）」

「（そう…？）」

ユーノはツナの方を向いた。

「（ホントは、まだ分からないんだ…。ツナさんを巻き込んでホントによかったのか…）」

「（……ツナくんなら大丈夫だよ）」

「（うん。それは分かってるんだけど…）」

ユーノの心の中にあつた最後のしこり、それはあの炎の事である。あれには魔力が感じられなかった、つまり魔法以外の力と言う事である。

ツナから聞いた話では、魔法ではない特殊な力と言う事である。だがその回答は曖昧であり、なのはもユーノもあの炎について正確には分かっていなかった。

「（ユーノくん…？）」

なのはの声にユーノはハッとする。

「（いや…ごめん。何でもないよ）」

それから数分前、ツナ達が外でケーキを食べ始めた頃、翠屋の奥の部屋で士郎とリボンが話しあっていた。

「綱吉くん…ホントに成長したね…。それに昔の家光にも似てきたんじゃないかな？」

「まあな、何せこの俺が鍛えたんだ」

「ていうことは、やっぱり綱吉くんがボンゴレファミリーの十代目に？」

「…ああ。最も、まだ“正式”には決まっていないな…」

「そうか…。まあ、俺がボンゴレについて知っているのは名前と知り合いがいるってことぐらいだから、あんまり横から口を挟めることじゃないけど…、やっぱり綱吉くんのやりたいようにやらせた方がいいと思うよ」

「九代目も同じことを言ってたぞ」

そう言うリボン。その表情は真剣なものに変わっていた。

そして、自ずと土郎の表情も真剣になる。

「リボン…、君はどうしたいんだい？」

「…俺はアイツをマフィアのボスに相応しい男にするよう依頼された。…それだけだぞ」

それからケーキを食べ終え、ツナ達は翠屋の店内に入った。

「ありがとうございます！ ケーキ、すごくおいしかったです！」

ツナが土郎に対してそう言う。土郎は笑って答えた。

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

そうツナと土郎が言葉を交わし合っている中、外が騒がしくなった。そのほとんどが女性の歓声であり、店内にいる客たちは窓から外を眺めた。

「何あの人…！　すごくかっこいい！」

「あの人外国の人かな！？　金髪地毛っぽいし！」

「でも周りにいる人たち、なんか怖そう…」

そんな客たちの声が気になって、ツナは窓の外を見ようとす。

ちょうどその時、翠屋の扉が開かれた。

「いらっしやませ」

そして黒いシャツの上から黄茶色で黒い毛皮のフードがついたコートを着た金髪の美青年と、それを取り巻くような黒いスーツの人たちが中に入ってくる。

「！？　デイ、ディーノさん！？」

それはボンゴレの同盟マフィアの一つ、キャバッローネファミリー十代目ボス、跳ね馬ディーノだった。

「よ！　ツナ、リボーン」

いつもの笑みを浮かべ、ツナに答える。

それからディーノは辺りを見渡した。

(リポーンから話しは聞いてたけど…、ここが翠屋か…)

ディーノが見渡している中、なのはがツナの服の袖を引っ張った。

「ツナくん？ あの人は？」

なのはの質問にツナは動揺する。さすがにありのままを説明するとはできない。

「え！？ あ、あの人は…、えっと、知り合いのお兄さんだよ」

しどろもどろにそう言うツナ。さすがに怪しいとなのはは半目でツナを睨んだ。

徐々に息苦しくなっていく空気。ちょうどその時、リポーンがディーノに話しかける声を耳にする。

「おい、ディーノ。お前どうしてここにいるんだ…？」

「あ！ そうですよ！ ディーノさん一体なんで!？」

そう言いながらなのはから離れるツナ。なのはがほんの少し悔しそうな顔をしたがツナは気にしない。

そして、ディーノはリポーンとツナの質問に答えた。

「いや、お前らに用があつてさっきツナの家に行つたんだよ。そし

たらツナ達なら海鳴に行ったって奈々さんに教えてもらってな。それで海鳴でリボーンが行くとしたらここだろうと思って来たら案の定って奴だ」

「俺たちに用ってなんだ？」

リボーンがディーノに尋ねた。

「ああ、それだけだな。これから俺と一緒に来てほしい所がある」

それからディーノが一通の手紙を取り出した。

「九代目からの頼みごとだ」

標的3 翠屋（後書き）

ディーノさん登場！

個人的にディーノさんは大好きです！（活躍するかどうかは別…）

そして次回は新しいなのはキャラの登場です。

あと、今回からアンケートを取りたいと思います。

?この作品のヒロインについて

?炎真×フェイトについて

です。大まかなことは下に書きます。

まず?について

お恥ずかしいながら、ツナの相手が最終的に誰になるかを、アンケートで決めたいと思います。誰が良いかありましたら投票お願いします。

そして?について

炎真×フェイトの要望が多かったため、本気で検討してみようと思います。

賛成意見と反対意見の数で決めようと思います。

ご勝手な要望ですが、皆さま御協力よろしく願いします。

最後に、他にも何か要望やアドバイスがあれば、気兼ねなくお願い
します。

標的4 九代目（前書き）

今回は伏線が結構あります。全部回収できるのはstrickers
編になると思います。

はっきり言って内容なんてない駄文です。作者の計画性の無さのせいで、もうちょっと後で書こうと思った話を先にすることになりました。

本当にもうしわけありません。

標的 4 九代目

喫茶翠屋を後にしたツナ、リボン、それにディーノとロマーリオ含む部下数人。たどり着いたのは九代目が日本在住中に泊まっている高級ホテルである。

その周りにいた黒い服の大柄の男たち、おそらく九代目の護衛だろう。

ディーノがその護衛達に説明し、二人はそのホテルの最上階、九代目の泊まっている部屋の前まで案内される。

そして扉が開かれると、目の前に九代目が立っていた。

「九代目！」

「やあ、綱吉君、リボン、それにディーノも、良く来てくれたね」

ツナの言葉に、九代目がそう返す。ディーノは頭を下げてそれに応えた。

それから九代目に案内され、四人は奥のソファに腰を下ろした。

ツナもリボンも、ディーノにしても、話しの内容は理解していない。手紙に書かれていた内容は、このホテルまできてほしいという事だけだったからだ。

そして九代目は周りにいた護衛を下がらせる。それが何を意味するのか、ツナは理解できていなかったが、リボンとディーノはだい

たいの事を察した。つまりこれから行われる話の内容が機密事項であると言ったことだ。そして、機密であるからこそ手紙にはアレだけしか書かれていなかった、それも理解できた。

「わざわざ呼び出してすまんかったの。本当はボンゴレの5大勢力のボス全員を集めたかったじゃがのう。他の3人はどうしても来れないそうじゃ」

（五大勢力って…）

九代目のその言葉を聞き、ツナは生唾を飲んだ。今から行われる話の重要性をやつとのこととで理解したのだ。緊張が襲ってきたのである。

そして、その言葉を聞いたリボーンの顔が一瞬こわばるのが分かる。おそらく何の話が行われるのか理解したのだろう。だが同時に、そのリボーンの表情に物言えぬ不安を抱いた。

そしてリボーンが口を開いた。

「話つて言うのは、ジュエル・シードの事か…？」

ジュエル・シード、その言葉にツナの心臓がドクンツと飛び跳ねる。一体どうこと？なにも理解できぬまま、話しは進み始めた。

「知っておるのか、リボーン」

「ああ、それにツナも知ってるぞ？」

その言葉を聞き、九代目は一瞬動揺する。それからすぐに、ツナに

視線を向けた。

(そうか…、これも運命か…)

そんな九代目にリボーンは言った。

「やはりアレは、ロストロギアか…」

「ロストロギア!? リボーン、ツナ!?!」

「ああ」

「ちよつと待つて下さい!?! 何で九代目が魔法を! デイリーさんも! それにロストロギアって!」

自分を置いて勝手に進んで行く会話に、ツナが叫んだ。

「そうじゃったな。ツナ君には説明せねばな…」

そして九代目が説明を始めた。

ロストロギア、それは過去に滅んだ超高度文明から流出する、特に発達した技術や魔法の総称のことである。多くは現存技術では到達出来ない超高度な技術で造られた物で、使い方次第では世界はおろか全次元を崩壊させかねない程危険な物もある。

「全次元って…」

その説明を受け、ツナが絶句する。一応なのはとユーノから、次元世界についての説明はあった。

そんなツナを見て、九代目は話を続ける。

「ワシの知り合いに魔法使いがおつてな、急に知らさせた事じゃ」

九代目の知り合いに魔法使いがいる事、それを聞いてもツナの様子は変わらない。ただ、何故九代目が魔法を知っているのか、その理由が理解できたという感情しかないからだ。それでも普段の彼なら驚愕していたであろう。ただ、全次元が滅びるかもしれないという衝撃の前に霞んでしまっただけである。

「綱吉君、この世界で魔法の力を持つ者に出会ったじゃろ？ その子らはジュエル・シードを集めようとしておる。ワシの守護者はついこの間おきたシモンファミリーとの件の収拾に務めておつて手が回せん。ワシももうじき本国に戻らねばならん。今頼めるのは君だけじゃ。手を貸してやってくれんか？」

九代目の言葉に首を振る理由もない、ツナは元々からそのつもりでいたからである。だがツナは、自分でも気付かず、頷く事を戸惑っていた。一瞬だけだが、違和感を感じたのだ。重要な何かを隠されているようなそんな感覚。頭ではなく本能が理解した。

「ん？ どうかしたのか？ 綱吉君？」

「あ！ いえ！ 何でもありません。俺、最初からジュエル・シード集めは協力するつもりでしたから！」

ハツとし、あわてて九代目の言葉に答えるツナ。この時、ツナの頭はまだ先ほどの違和感を理解していなかった。

それからホテルを出たツナ。リボンとディーノは中で九代目と話があるらしい。

「うーん…。何だっただろう…」

先ほど何故すぐに顔がなかったのか、ツナはそれを考えていた。

（一体どうしたんだろう、俺…。それにリボンとディーノさんの話って一体…）

そう思いながらも、ツナは九代目のファミリーに案内され、黒いリムジンまで足を

進める。その時、不意にツナの頭の中に九代目の言葉が浮かぶ。

『この世界で魔法の力を持つ者に出会ったじゃろ？』

（アレ…？ そう言えば何で九代目、なのはちゃんとユーノくんの事知っていたんだろ？）

ホテルの最上階、九代目の部屋。そこでは九代目とリボン、それにディーノがもう一つの本題に入っていた。

「どういうことだ？ さっきの話し？ 確かにシモンの件で手が回すのが難しいって事は分かるが、できないわけじゃねえはずだぞ？」

その部屋の中で、リボンが九代目にそう言う。それに九代目は頷いて答えた。

「ああ、君たち二人をここに残したのはその話に関係があるんじゃない。ディーノにも頼まなければならん事がある。ワシは今立場上動く事が出来んのじゃ……」

九代目のその言葉にリボンはゆっくりと返した。

「……………管理局か？」

「ああ、それも上層部……。管理局の闇が絡んでおる」

「管理局の闇……、ユニオンも動くんですか？」

ディーノのその言葉に九代目は静かに頷いた。

「おそろく動くじゃろ。ワシに連絡が来たと言う事はのう…」

リボンとディーノの顔に影が掛る。それは二人にとってはあつてはならない事態。それを表したような表情であつた。

「九代目。管理局からあなた宛てに届いた内容は何ですか？」

時刻は夕刻、ここ並盛町のとある建物の屋上に、黒いマントを纏つた金髪の少女が立っていた。

「この付近だね。ロスト・ロギア、ジュエル・シードがあるのは…」

夕日に照らされるその少女、年齢はなのと同じ9歳位の子供である。そして、その隣には大きな赤毛の犬、いや狼がいた。

「行こう。アルフ」

「とつと見つけて終わらせよ、フェイト」

その少女の言葉に大きな赤毛の狼が言葉で返した。常識では考えら

れない事であるが、アルフはフェイトが作った使い魔である。ただの犬と言っわけではない。

（待ってて母さん…、すぐに見つけるから…）

（早く見つけないと…、またあの女に何されるか分かったもんじゃないよ…！）

そしてフェイトとアルフの姿がその場から消えた。

並盛町のとある河川敷の橋の下。そこに一人の少年がやって来た。気弱そうな風貌で、頬と鼻に絆創膏をつけた少年。彼の名前は古里炎真。ツナの親友であり、シモンファミリーのボスでもある人間だ。

彼の手に握られているのはビニール袋。その中には猫の餌とミルクが入っていた。

「チツチツチツ…」

炎真の声に気づき、二匹の猫が現れる。

少し待っててね。炎真はそう言い、餌とミルクを用意した。そしてそれに飛び付く二匹の猫。それを見て炎真は微笑んだ。その傍らに落ちている、青く光る宝石の存在に気づかず…。

所変わって、並盛町の病院の屋上。そこに二人の青年が立っていた。一人は白髪で三白眼、左目の下に三つ爪のマークがある男。もう一人は腰まで伸びる長い水色の髪と、薄い青色の瞳をした男である。

「白蘭、本当に見つかるのか…?」

「ホントに心配性だね君は。間違いないよ、以前僕の見た光景と同じなら必ず見つかる。僕の新しい同士になる子は」

その青年、白蘭とはかつてツナが未来で死闘を繰り広げた存在であり、ツナにとっては強く、恐ろしく、理解を超えた怪物である。

白蘭は微笑んで言葉を続けた。

「今回は僕も目立たないように行動するよ。今はまだ綱吉君と会いたくないしね。君の事を知られるのもまずい」

「俺はそんなへマはしないがな……」

そしてその水色の髪の毛の男性は白蘭から背を向け、病院の屋上の扉目指して足を進めた。

「白蘭……、妹の事は頼んだぞ」

「うん。ちゃんと分かってるよ」

標的 4 九代目（後書き）

更新遅くて申し訳ありません！

次回はもう少し早く投稿できるように頑張りたいと思います！

あと、アンケートにつきましては、ヒロインなのは行くことと思います。炎真×フェイトの意見も多いので、それも決定です！

お答えいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9600w/>

Magical Girl Lyrical Nanoha ~ The Flame Of The Sky ~

2011年11月5日02時13分発行